

温泉地研究と歴史地理学

関戸明子*

I. はじめに

1970年代半ばには「観光地理学は地理学の中でも、後進的な分野であると考えの方が常識的な見方といえるかもしれない」という状況にあった¹⁾。そして1980年代後半のリゾートブームにともなう地理的現象の顕在化によって、観光地理学が注目されるようになった²⁾。その後、観光全般に対する社会的な関心の高まりを受けて、地理学のみならず、社会学、文化人類学、経済学、歴史学、都市計画学などのさまざまな分野において観光研究が展開されている。

そうしたなか、この20年ほど、筆者は温泉地を対象とする研究に取り組んできた。それには二つの契機があった。一つは、近代日本の地域形成と民間地図・画像資料の活用に関する共同研究に携わったことにある。そこで、鳥瞰図を活用して、近代の温泉地の景観を読み解くことを試みた³⁾。また、共同研究の成果として、鉄道院・鉄道省編纂の官製ガイドブックを手がかりに、観光旅行の目的地としての温泉地の様相を考察したもの⁴⁾、鳥瞰図・観光案内などの多様なメディアを対象

として資料論的考察を行い、視覚的イメージを探究したもの⁵⁾を公刊した。

もう一つは、村落研究を行うなかで入会林野に焦点をあてて考察しており⁶⁾、地域社会における共有資源の役割に関心をもっていたことにある。コモンズ論では、共同管理の対象である自然資源として、森、農地、放牧地、川・川原、海・浜辺、その他(温泉など)をあげている。ローカル・コモンズを対象にした研究では、「山野海川」にかかわる資源を対象とすることが多く、温泉を扱った事例はほとんどみられない。そこで、温泉資源の集中管理という制度に注目した論考をまとめた⁷⁾。

本稿では、前者の歴史地理学からのアプローチによる温泉地研究の特徴と、そこから見出される知見について、具体的な事例を紹介するなかで論じたい。

II. 明治前期における内務省衛生局と群馬県による温泉調査

観光研究を進めるとき、統計データの不備に苦勞することが多い。都道府県ごとに調査

* 群馬大学共同教育学部

キーワード：温泉、歴史地理学、内務省衛生局、絵はがき、草津温泉

Key words : Hot Spring, Historical Geography, Hygiene Bureau of the Ministry of Home Affairs, Picture Postcard, Kusatsu Onsen

方法が異なっていて、比較することが困難であったりする。さらに第二次大戦以前には、観光客の動向などは統計調査の対象になっていないため、数量的に把握することが困難である。

しかし、温泉に関しては、政府が早くから調査の対象としていた。政府による温泉（行政用語としては「鉱泉」）調査は、1873（明治6）年7月、文部省医務局が各府県に管内の鉱泉湧出の年代等を調査させて申告するように通達したことに始まり、それから逐次、採酌して司薬場に送らせて泉質の試験を行い、または司薬場より派遣して実地に検査してきたとある⁸⁾。1875（明治8）年には内務省の新設にともない衛生行政が文部省から移管されて、衛生局が設けられた。1876（明治9）年6月現在、申告された鉱泉は663か所、うち試験済みが41か所と報告されている⁹⁾。

最も早い時期の鉱泉の分析表としては、

1876年4月の『内務省衛生局雑誌』第1号に掲載された「熊谷県管下鉱泉分析表并医治効用」があげられる。この記事には、伊香保・四万・草津の3か所の分析表を掲げる。いずれも群馬県にある温泉地であるが、当時は群馬県と入間県が1873年に合併して成立した熊谷県の管下にあった。

第1図に記事の冒頭部分を示した。これによれば、伊香保・四万・草津は山谷の間にあって清涼な空気と鉱泉の効用により治療を施すのに適すべき地である。しかし従前、入浴者はいたずらに効用のあることを知って原質のあるところを弁せず、古来ただ想像や慣習によっていたので、昨年より司薬場において源泉を採酌して成分を分析し、効能を記すことによって、患者の便宜を図るために温泉の調査が行われたのである。

また、凡例では、浴泉の温度、熱いときは

<p>上野ノ地タルヤ山ニ依リテ國ヲ成レ多ク鑛泉ニ富ニリ其最モ著ル ヲ者ヲ草津四萬伊香保ト曰フ皆熊谷縣管下ニ在リ伊香保海面ニ リ高キト凡三千尺村落其山腹ヲ占メ正北ニリ漸ク東ニ面シ南方山 ナ背ニス四萬村高サ二千五百尺南北ニ山ヲ帯ヒ南西川ヲ隔テ山ニ 對ス草津村高サ四千五百尺原泉東北ニ面ス其成山谷烟雲ノ間ニ位 スルヲ以テ雨候常ニ多シト雖モ能ク清涼ノ空氣ヲ受ク且鑛泉ノ効 用ナ有スルカ故ニ各其疾ニ因リテ治療ヲ施スニ適應スベキノ地ト ス然レモ從前此ニ浴スル者徒ラニ其効用アルヲ知リテ其原質ノ在 ル所ヲ辨ビテ古來唯其想像ニ因リ知ラズ識ヲ慢習ノ久キヲ經テ 瘋漢ノ草津ニ赴キ療者ノ伊香保ニ赴クガ如キニ過キザルノミ去歲 司薬場ニ於テ其原泉ヲ採酌シ成分ヲ分析シ功能ヲ記ス蓋シ鑛泉ノ 効用ハ服用ヲ先キニシ溶湯之ニ亞グ然ルニ本邦ニ在リテハ偶ニ溶 湯ニ取リ偶マ之ヲ服用スル者アルモ亦皆想像ニ原ツキ其分量ト功 害トナ間ハザルモノ多シ今其試驗表ト撰定セル醫治効用トナシ 示レ以テ患者ニ便ニス</p>	<p>凡 例</p> <p>一 浴泉ノ温度ハ病症ニヨリ稀ニ高度ノモノヲ用ルルトアリト雖モ大 抵華氏ノ九十八度乃至百度ヲ適宜トス若シ其熱度之レヨリ過ルモ 決シテ常水ヲ混シテ藥氣ヲ稀薄ナラシム可ラス但長ク放冷シテ適 度ニ至ラシムヘシ</p> <p>一 浴敷ハ老人一日一回少壯者一日三回ヲ率トナスヘシ尤時刻ハ朝夕 フ宜トス</p> <p>一 内服ノ量ハ泉質弱症ニ因テ遠異アリト雖モ大抵一日一盞ニヨリ五 六盞ニ至ルヲ率トシ而シテ朝夕兩度空心ニ服スルヲ法トス其溫華氏 八十五六度ヲ過テハカラス若シ一回二三盞ヲ服サントスルハ先 ツ一盞ヲ傾テ後少許ノ運動ヲナシ再ヒ一盞ヲ盡シ又運動シテ後 盞ヲ舉テヘシ</p> <p>一 服後ハ朝夕共三十分時間ヲ經ザレハ食餌スベカラズ</p> <p>一 各泉飲下ニ掲載セル効用ニ的中セル病症ノ者ト雖モ各自其原病ニ 就テ適宜ノ療養ヲ加ヘ入浴取ハ服用スヘシ總テ鑛泉ハ醫療ノ力ヲ 補助スルモノト心得ベシ</p>
--	---

第1図 「熊谷県管下鉱泉分析表并医治効用」の一部

『内務省衛生局雑誌』第1号、1876年4月27日発行
 国立国会図書館・近代デジタルコレクションによる

水で薄めず放冷すること、入浴回数は老人1日1回、少壯者1日3回とすること、鉱泉の内服の仕方などを記し、最後に、総じて鉱泉は医療の力を補助するものと心得ることと述べている。ちなみに、浴泉の華氏98～100度は、摂氏36.7～37.8度で低めの設定となっている。

草津については、熱の湯・鷲の湯・地藏の湯・御座の湯・瀧の湯の五つの分析表を掲載しており¹⁰⁾、効用として、痲疾・経久黴毒・先天遺毒・血液変敗をあげている。梅毒に対する効能は近世より知られていたが、あらためてお墨付きを与えたといえよう。

同じ年の1876年6月27日、熊谷県の県令楢取素彦は各区の戸長にあてて「管下上州群馬郡伊香保、吾妻郡草津、四万ノ三温泉、原質分析ノ上、医治効用並内服分量、入浴ノ心得ノ大意書、別紙ノ通為心得下渡候、毎戸無洩可通知者也」と布達した¹¹⁾。

伊香保・四万・草津の入浴者心得は、群馬県行政文書の綴りに保存されているが、筆者は古書店から買い求めた冊子を所蔵している。これは戸長などに配布されたものだったと思われる。三つの温泉地それぞれに入浴者心得が作成されており、前半の案内はすべて共通で、後半の適応症と内服の心得については異なる内容となっている。ちなみに、本文書には分析表は掲載されていない。

第1図に掲げた『内務省衛生局雑誌』の記事と比較するために、第2図に「草津入浴者心得」の前半を示した。この文書は木版刷りで、すべての漢字に振り仮名を付しており、一部は左に意味を添えている。たとえば「入浴者」の左に「ゆあみのもの」、「泉質」の左に「くすりゆ」、「浴法」の左に「ゆのきそく」とあって、理解を助けている。

内務省と熊谷県の心得とも「医療の力を補助」とあるのは同じだが、後者には、凡俗の煩雑を脱することによって「治療の一大補益」になるという記述が加わっている。

また浴泉の温度と入浴回数については同じ内容となっているが、残りの3点を新たに加えている。こうした注意があるということは、酒食後にすぐ入浴したり、浴室や浴槽が不潔であったり、大声で騒ぐことが一般的にみられたことを反映しているといえよう。

群馬県には、管下における温泉調査の記録が残されている。1876年の『内務省衛生局雑誌』第1号の記載内容を利用したものに、1883(明治16)年の「群馬県温冷泉分析表並医治効用調」¹²⁾がある。文書の表紙には上記タイトルとともに「第3回ノ調」と記されている。

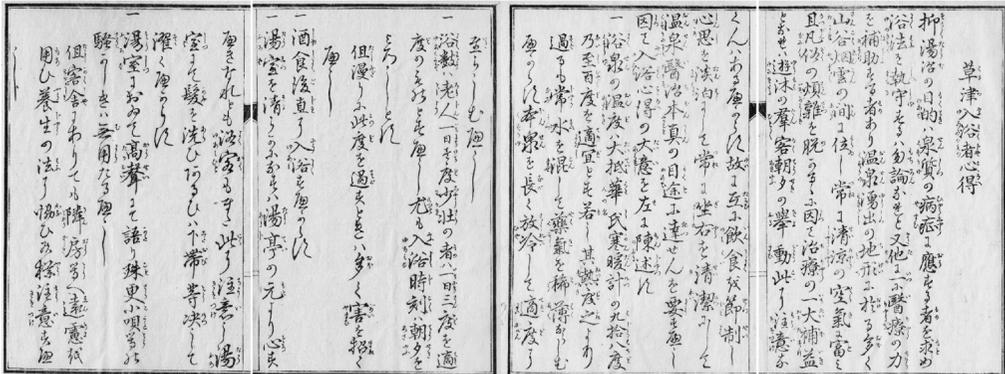
本文冒頭に「群馬県管下鉱泉分析表並医治効用調」、2～3行目に「但伊香保、四万、草津ノ三温泉ハ衛生局ノ調査ニ加フルニ本県ニ於テ施行セル臨場試験ノ成跡ヲ以テス」とある。4行目以降の記述は「熊谷県」が「群馬県」となっているほかは、第1図に示した記事と同じ内容である。

この報告書は、新湯・山口・日向見の三つに分けられている四万を一つと数えれば、22か所の温泉地の分析表を記載する。このほか、位置、概況、発見年代、道路の便、郵便局と医師の有無、浴舎数、年間浴客数、効能などの項目についても調査されている。なかには分析表の成分が数量ではなく、大量・少量・痕跡となっていたり、効能が未詳とされていたりするなど、粗雑な部分はあるが、多様な情報を収集していたことがわかる。

年間浴客数については、19か所に記載がある。このうち、単年度のデータを示してい

草津入浴者心得

- 一 湯治の目的ハ、泉質の病症に應ずる者を求め、浴法を執守するハ勿論なれど、又他に一に医療の力を補助する者あり、温泉湧出の地形に於る多く山谷烟雲の間に位し、常に清涼の空気に富み、且凡俗の煩雜を脱かるゝに因て、治療の一大輔益となれハ、遊沐の群客、朝夕の挙動、此に注意なくんハあらず、故に互に飲食を節制し、心思を淡泊にして、常に座右を清潔にして、温泉医治、本真の目途に達せんを要すへし、因て入浴心得の大意を左に陳述す
 - 一 浴泉の温度ハ、大抵華氏寒暖計の九拾八度乃至百度を適宜とす、若し其熱度、之より過るも、常水を混して薬氣を稀薄ならしむへからず、本泉を長く放冷して適度に至らしむへし
 - 一 浴数ハ老人一日老度、少壯の者ハ一日三度を適度のものとすへし、尤も入浴時刻ハ朝夕をよろしとす
 - 一 但漫りに此度を過すときハ、多く害を招くへし
 - 一 酒食後、直に入浴すへからず
 - 一 湯室を清らかにすハ、湯亭の元より心すへきなれども、浴客もまた此に注意し、湯室にて髪を洗ひ、あるのハ下帯等、決して濯ぐへからず
 - 一 湯室におゐて高音にて語り、殊更、小唄等の騒かきハ無用たるへし
- 但、客舎にありても、隣居等へ遠慮を用ひ、養生の法に協ひ候様注意すへし



第2図 「草津入浴者心得」の前半部

熊谷県布達 1876年6月（筆者蔵）

るものが12か所、複数年とその平均値を示しているものが7か所ある。平均値が1万人を超えている温泉地は、草津（23,850人）、伊香保（16,818人）、蓼塚（10,113人）の三つで、それぞれ1876～1881年、1876～1880年、1876～1882年の入浴客数が記載されている。このように早いもので1876年のデータを記録していた。こうした地方での調査をもとに、内務省衛生局は『日本鉱泉誌』を編纂することになる。

III. 内務省衛生局による調査報告書と明治・大正期の入浴客数

『日本鉱泉誌』3巻は、1886（明治19）年に出版された¹³⁾。本書は、1881（明治14）年にドイツ・フランクフルトで開催された万国鉱泉博覧会に出品するために、各府県に照会して集めた、鉱泉の成分、位置景況、浴客数、発見年などの記録をもとに作成された。上巻482ページ、中巻466ページ、下巻396ページの分量があり、922か所の温泉地の

データと、内務省地理局地誌課の府県分轄図を基図とする分布図を収載している。1934(昭和9)年の調査で鉱泉場868か所・源泉5889か所であったことを考えると¹⁴⁾、明治前期の段階で、いち早く温泉資源の一覧表が作成されたことが理解できる。

『日本鉱泉誌』上巻の通論では、鉱泉は、疾患を救治し健康を保養する貴重な自然産物である、保健の益は、勤勉な労働を休憩して作業の新力を養成する、鉱泉によって療病保健の目的に供用するには適当な保健指導を要するなどと述べている¹⁵⁾。ここでは、公衆の保健のため、鉱泉を適正に用いること、それには温泉地の改良が必要であると論じられている。

前述の「群馬県温冷泉分析表並医治効用調」を一見したとき、『日本鉱泉誌』編纂のために収集されたデータの控えかと思っただが、両者を対照すると異なる箇所が多い。そもそも、前者は22か所を記載していたが、『日本鉱泉誌』では群馬県の温泉地は41か所となっていて大きく増えている。また、前者では浴客数が未詳となっていた多くの温泉地も『日本鉱泉誌』では数値が記されている。1883年作成の「群馬県温冷泉分析表並医治効用調」から1886年に『日本鉱泉誌』が出版される間も、情報収集が続いていたことがわかる。

『日本鉱泉誌』に記された浴客数については、凡例では1878(明治11)年以後2~3年間を平均して1か年の概数をあげるか、平均でない場合は何年かを示すとある。しかし、実際のデータをみると、1876年から1880年、1881年から1883年といった期間をとっている例なども若干含まれている。したがって『日本鉱泉誌』に記された年間入浴客数は、明治初期、おおむね1880年前後の数値と考えれ

ばよいであろう¹⁶⁾。

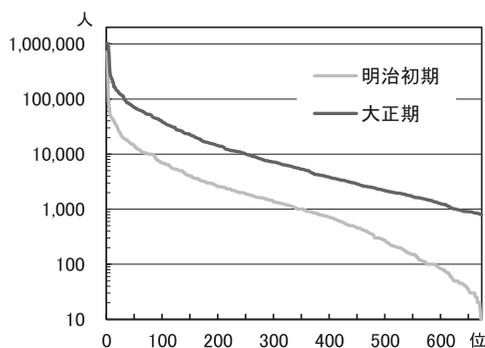
最も多いのは道後(愛媛県)の721,721人で、1日当たりに換算すると、1,977人となる。道後の入浴客数は、2位の武雄(佐賀県)290,400人、3位の山鹿(熊本県)95,046人と比べても突出して多い。草津は全国25位で24,150人であった。草津のように上位の温泉地でも、当時はまだそれほどの入浴客を集めていなかったのである。

『日本鉱泉誌』のあと、全国の温泉地を対象にした調査報告書としてあげられるのは、『*The mineral springs of Japan*』である¹⁷⁾。本書は1915(大正4)年にサンフランシスコで開催されたパナマ太平洋万国博覧会に出品するために、内務省東京衛生試験所により編纂された。第2部には、泉温・湧出量・陽イオン・陰イオン・放射能・電気伝導率などの分析結果を各地の鉱泉ごとに記載したデータと、放射線量や泉温、入浴客数など調査項目ごとに上位から並べ替えた一覧表を掲載する。ただし、本書のデータはすべての温泉地を網羅したものではない。

これに対して『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』には温泉地がもれなく収録されている¹⁸⁾。本書は、1921年12月の衛生局長の照会に対する地方長官の回答にもとづき、内務省衛生局が編纂したものである。全国946か所の温泉地について、交通関係、管理方法、設備概要、効能、分析表を記載する。入浴客数は1911(明治44)年から1920(大正9)年の10年間の平均がとられている。ただし、新設のものは単年または数年の数値である。

大正期における年間入浴客の全国合計は1,681万人で、明治初期の370万人と比べると4.5倍となっている。

入浴客数の1位は明治初期と同じ道後で



第3図 年間入浴客数の順位規模の変化
『日本鉱泉誌』『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』より作成

1,030,237人、2位は城崎(兵庫県)で1,007,175人、3位は別府(浜脇を含む、大分県)で778,799人であった。明治初期と大正期の客数のそれぞれの倍率を求めると、道後1.4倍、城崎79.3倍、別府35.4倍となり、城崎と別府は、大正期までに急速に拡大したことがわかる。

全国の温泉地の入浴客数がどのように変化したのかを、第3図に示した。この図は、各地の温泉地を入浴客数の多い順に並べて、縦軸を対数にして表している。この図からは、順位が下位の温泉地において、入浴客の伸び率が大きくなっていることがわかる。

第1表は、年間入浴客数の規模別に温泉地数を計上したものである。年間10万人ならば1日当たりの入浴客は274人、年間5,000人ならば1日当たり14人となる。明治期から大正期にかけては、大半の温泉地では、長期滞在の湯治客が主体であった。寒冷地では季節的な営業が見られたし、近隣の農民などは農閑期に湯治に出かけることが多かった。したがって、年間を通して一定の客を迎えていたわけではない。

ここで、大正期に年間5,600人ほどの入浴

第1表 年間入浴客数の規模別にみた温泉地数

入浴客数	1日当たり入浴客数	明治初期累積数	大正期累積数
500,000～	1,370		4
100,000～	274	2	31
70,000～	192	7	80
30,000～	82	19	123
10,000～	27	80	250
5,000～	14	133	361
1,000～	3	354	628

『日本鉱泉誌』『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』より作成

客を数えた三つの温泉地を事例として、『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』に記されている施設概要をみたい。青森県の蔵館温泉には宿屋4戸、59室、共同浴場4か所、群馬県の沢渡温泉には旅館客舎4戸、村営浴場4か所、鳥取県の三朝温泉には内湯旅館8戸、木賃宿8戸(内湯の設備あるもの6戸)、共同浴場2か所、療養所男女各1室とある¹⁹⁾。このように年間入浴客が5,000人を超える規模ならば、おおよそ宿泊施設や浴場などが整っていたと考えられる。こうして大正期までに、温泉地の施設が全国的に整備されていったのである。

IV. 絵はがきからみた草津温泉の景観変遷

過去の時間軸のある時期に、空間的事象がいかに関係していたのかを描くこと、その「時の断面」を積み重ねて歴史的な変遷をたどること、こうしたアプローチは歴史地理学研究的なかで重要な位置を占めてきた。ここでは、絵はがきを活用して草津温泉の景観変遷を読み解いていきたい²⁰⁾。

絵はがきには多くの種類があるが、風景写真を印刷した名所絵はがきは、そのなかで主

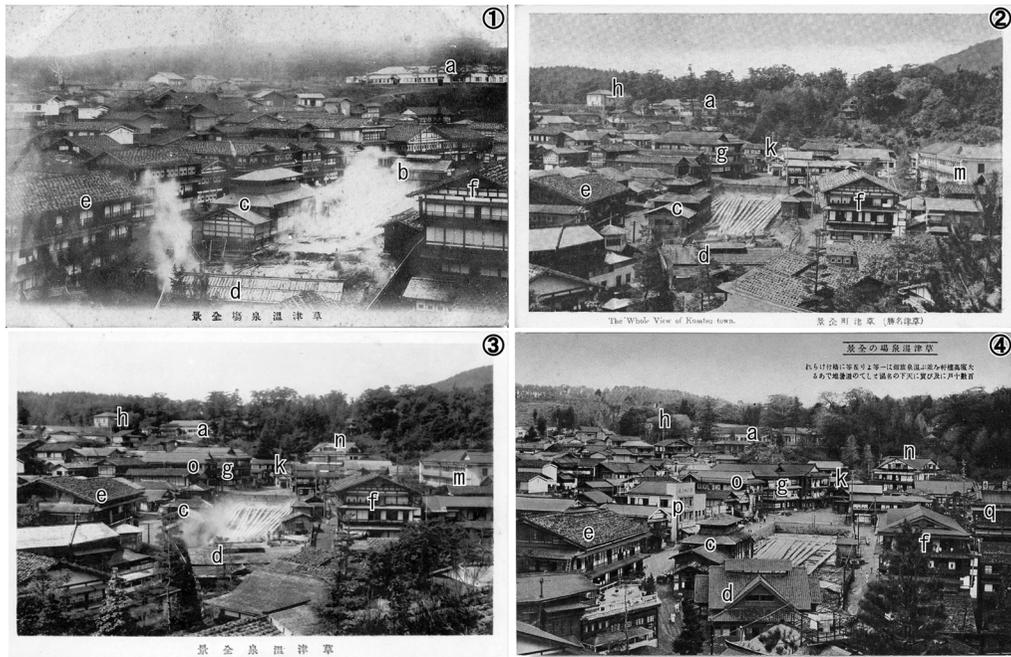
要な位置を占めた。旅先で絵はがきを買って求めて家族などに送る、または旅行の記念に絵はがきを蒐集するという行為は、交通機関の整備にともなう旅行の大衆化、郵便制度の充実、写真と印刷技術の発達といった要素によって成立した。

絵はがきには、図書・雑誌のような書誌情報がなく、年代を特定しがたいという問題がある。そこで、第二次大戦以前の発行時期を特定する手がかりとして、①私製はがきが認可された1900（明治33）年、②宛名面の3分の1が通信文に使用可能となった1907（明治40）年、③宛名面の2分の1が通信文に使用可能となった1918（大正7）年、④宛名面上部に記載の「郵便はがき」が「郵便はが

き」と濁点加わった1933（昭和8）年という三つの画期が利用できる。ただし、この手がかりは、発行時期を見分けるもので、写真の撮影時期を示すものではないことに注意せねばならない。

第4図に温泉街全景を撮影した4枚の絵はがきを示した。中央にみえるのが、草津の主要な源泉である湯畑で、湯樋10数本が架けられている。湯畑はこの湯樋をとおして温泉を冷ますとともに、沈殿した湯の花の採取を行う場所である。

①には奥の高台に1904年竣工で吾妻郡内屈指の大校舎と評された小学校(a)があるが、1908年4月完成の草津町役場はないので、この間の撮影とわかる。この写真では、湯け



第4図 絵はがきにみる「草津温泉全景」の変化

①発行1907-18年、②③発行1918-33年、④発行1933-45年
 (a) 草津小学校、(b) 綿の湯、(c) 松の湯、(d) 瀧の湯、(e) 大東館、(f) 桐山、(g) 七星館、(h) 草津町役場、(k) 白旗の湯、(m) 一井辰巳館、(n) 富久住、(o) 萩原、(p) 名古屋館、(q) 奈良屋

わりに覆われた湯畑の奥に綿の湯 (b)、左手に松の湯 (c)、手前に瀧の湯 (d) という共同浴場がみえる。松の湯の背後に3階建ての建物が連なっているが、ここの部分は1908年5月の大火で焼失した。このとき、37戸、60棟が焼失したが、望雲館や大東館 (e) は免れた。右手にみえるのは桐山 (f) である。共同浴場以外の建物はほとんどが板葺き石置き屋根となっていることがわかる。

②には多くの電柱が立っているの、電気の使用が始まった1919年以後の撮影と考えられる。小学校 (a) の左に草津町役場 (h) が確認できる。綿の湯がなくなり、その奥に白旗の湯 (k) がみえる。3階建ての七星館 (g) は大火後にいち早く新築されたが、これより左手の建物は、①と比べて低層で小さく、復興途上にあることがわかる。手前の瀧の湯 (d) には、湯気抜きの櫓が加えられている。前面に連続するアーチもつ一井辰巳館 (m) は1907年の建築で、1909年に増築されている。

湯畑には「昭和5年6月元幕府家人中村熊太郎書」と刻まれている「徳川八代将軍御汲上之湯」記念塔がある。③では記念塔は確認できないので、1930年以前の撮影と判断される。②と比べると、富久住 (n)、萩原 (o) などの旅館が新たに建てられていることがわかる。富久住の建物が鳥瞰図に描かれ始めるのは1922年のことで、その前後の撮影であろう。

④では1936年に建て替えられた瀧の湯 (d) がみえる。他方で、1937年に改築される松の湯 (c) は変化していないので、この写真は瀧の湯の完成後まもなく撮影されたものといえる。また、正面を平らにした看板建築の名古屋館 (p)、高層化された奈良屋 (q) を確認できる。桐山 (f) がトタン葺きの入母

屋造に改築されており、板葺き石置き屋根は大東館 (e) ぐらいいし残っていない。

『群馬県統計書』に記されている草津の延べ入浴客数について、5年間の平均値を求めると、

1906～10年は155,769人

1915～19年は150,004人

1924～29年は151,013人

1934～38年は256,715人

となる。

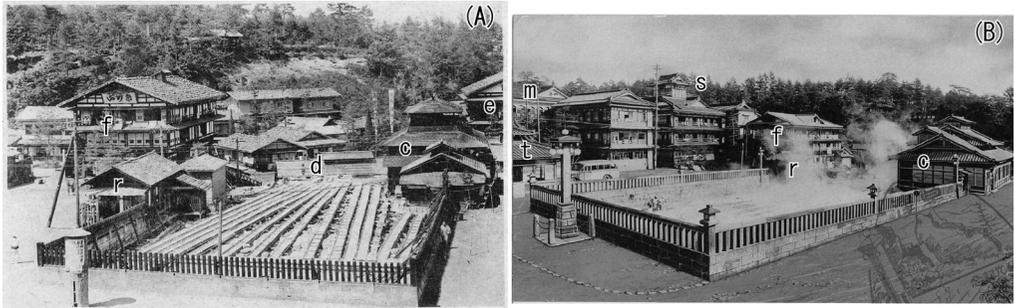
1900年代後半から1920年代後半までは15万人ほどで変化が小さかったが、1930年代半ばには25万人を超えて大きく増加している。

軽井沢と草津を結ぶ草津電気鉄道の全線開通は1926年9月、渋川と草津を結ぶ省営バスの運行開始は1935年12月のことである。標高1200mの山間地にあり交通が不便であった草津へ、東京を朝一番に出れば夕刻には到着できるようになり、療養目的の湯治客だけでなく、保養・遊覧客も増えていった。このように草津では1930年代に賑わいを増した。

さらに第4図とは反対側から湯畑を撮影した絵はがきから、湯畑周辺の景観がどのように変化したのかをみたい。

第5図(A)の中央には湯畑が大きく広がっている。右手前には綿の湯があったが、1910年作成の「吾妻郡草津町郷土誌」付図には描かれていないので、この頃までに撤去されたと考えられる。左手前にある広告塔は、1913年刊行の『上州草津写真帖』掲載の写真で確認でき、1914年と1916年発行の鳥瞰図にも描かれている。一方で、1921年頃に湯畑脇に造成された高山植物園がみえないので、1910年代の撮影といえる。

湯畑の奥に瀧の湯 (d) の屋根、右手に松



第5図 絵はがきにみる湯畑周辺の変化

(A) 発行 1918-33年、(B) 発行 1933-45年

(c) 松の湯、(d) 瀧の湯、(e) 大東館、(f) 桐山、(m) 一井辰巳館、(r) 巡査派出所、(s) 山本館本館、(t) 熱の湯

の湯 (c)、左手に「きり山」の看板がかかる桐山 (f) がみえる。湯畑の脇には巡査派出所 (r) が置かれていた。湯畑の外周はブロックと木柵で囲われていることがわかる。

第5図 (B) では、前述の「徳川八代将軍御汲上之湯」記念塔が左手に立っている。記念塔の右奥には1935年末に運行を始めたボンネット型の省営バスを確認できる

また、湯畑の囲いが木柵から石柵に取り替えられていることがわかる。現在、湯畑に残されている石柵の1本に「昭和九年八月草津町 旅館コモロ館 小林盛久」と彫られており、湯畑の外周は、1934年までに整備されたと考えられる。

湯畑奥にみえる3階建て入母屋造の山本館本店 (s) は1928年頃までに建築されたもので、その後、塔屋(展望室)が付け加えられた。(A) では桐山 (f) の左手は空地となっていたが、(B) になると、山本館本店の左右ともに3階建ての旅館が新築されている。

草津町は共同浴場の改良事業を行い、1936年に千代の湯と瀧の湯、1937年に熱の湯・松の湯・地藏の湯が新しくなった。左隅に一部がみえている熱の湯 (t) と右手の松の湯 (c)

は、薄い木片を重ねたこけら葺きの屋根であったが、瓦葺きへと変化していることがわかる。草津の入浴客数は1930年代に大きく伸びたが、こうした共同浴場の改築修繕も寄与したと考えられる。

この当時、熱の湯・松の湯・千代の湯・地藏の湯・鷲の湯では「時間湯」が行われていた。これは草津温泉独特の入浴法で、湯長の指揮の下で、湯をもむ、湯をかぶる、集団で3分間湯に浸かるという三つの要素を行うもので²¹⁾、療養目的の湯治客が利用していた。一方で、瀧の湯のみは有料で、源泉に若干の水を混ぜて温度を下げ、湯治が主眼でなく観光遊覧に来た客を迎えていた。第4図④によれば、瀧の湯は他の共同浴場と比べて大きくみえる。

ここまで検討してきたように、絵はがきの写真を活用することで、文書には詳細が記録されない具体的な歴史的景観の変遷をたどることが可能となる。

V. おわりに

本稿では、歴史地理学からのアプローチに

よる温泉地研究を取り上げ、まず、明治前期における内務省衛生局と群馬県による温泉調査に関する経緯と内容について整理した。こうした温泉調査は、温泉を医療の力を補助するものと捉え、分析表や医治効用を示すことによって患者の便宜を図ることを目的としていた。

その後、内務省衛生局はさまざまな情報を収集して調査報告書をまとめた。1886年出版の『日本鉱泉誌』上巻の通論では、公衆の保健のためには温泉地の改良が必要であることを論じている。

また、内務省衛生局によってまとめられた全国の温泉地の入浴客数のデータを用いて、明治初期と大正期における変化をみた。年間入浴客の全国合計は、明治初期の370万人から大正期には1,681万人と4.5倍に増加しており、とくに下位の温泉地での伸び率が大きくなっていった。このような入浴客の増加を背景に、大正期までに全国的に温泉地の施設整備が進んでいった。

さらに、草津温泉を事例として、風景写真を印刷した名所絵はがきから景観がどのように変遷したのかを検討した。資料としたのは、温泉街の中心部を俯瞰した絵はがきと、湯畑周辺を撮影した絵はがきである。写真を対比することで、次のように具体的な景観変遷を見出すことができた。

湯畑周辺の旅館は、ほとんどが3階建て板葺き石置き屋根となっていた。1908年5月の大火で焼失した部分は、徐々に再建されていった。石置き屋根の建物が次第に減少し、トタン葺きの入母屋造への改築が進み、旅館の新築もみられた。湯畑の囲いは1934年までに木柵から石柵に取り替えられた。

草津町は1936年から1937年に共同浴場を

改良し、瀧の湯、熱の湯、松の湯などが新しくなった。これらの共同浴場は、薄い木片を重ねたこけら葺きの屋根であったが、瓦葺きへと変化した。草津の入浴客数は1930年代に大きく伸びたが、これには共同浴場の改築修繕も寄与したと考えられる。

今後の課題としては、紀行文を素材として、旅行中の出来事や滞在中の行動を把握し、当時の人びとの観光経験を問うていきたいと考えている。そうした研究の一環として、自身で明治期の徒歩による旅程をたどるという企画を実践した²²⁾。さらに、近代におけるツーリズムの展開過程を、多様なメディアやテキストを分析することによって追究していきたい。

〔付記〕本稿は2019年11月30日に開催された立命館地理学会での講演内容をもとに再構成したものである。当日は多くの画像を取り上げたが、紙幅の関係で割愛した。そこで、IVの分量を減らし、IIとIIIの内容を加筆した。

注

- 1) 青木栄一・山村順次(1976)「日本における観光地理学研究的系譜」、人文地理、28(2)、171-194。
- 2) 鶴田英一(1994)「観光地理学の現状と課題—日本と英語圏の研究の止揚に向けて—」、人文地理、46(1)、66-84。
- 3) ①関戸明子(2002)「鳥瞰図に描かれた伊香保温泉の景観」、えりあぐんま、8、23-40。②関戸明子(2004)「四万温泉の鳥瞰図を読む」、えりあぐんま、10、5-24。
- 4) 関戸明子(2007)「北関東における温泉地の発達とその変容」、山根 拓・中西僚太郎編『近代日本の地域形成—歴史地理学からのアプローチ』、海青社、69-89。
- 5) 関戸明子(2008)「熱海温泉の鳥瞰図の特色と表現内容」、中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界—』、ナカニシヤ出版、45-62。
- 6) 関戸明子(2000)『村落社会の空間構成と地域変容』大明堂。

- 7) 関戸明子 (2011) 「コモンズとしての温泉—草津における温泉の利用・管理の事例を中心に」、谷口真人編『地下水流動—モンスーンアジアの資源と循環』、共立出版、222-243。
- 8) 内務省衛生局 (1877) 『衛生局報告』、1、44 甲-乙。
- 9) 前掲 8)、鉱泉表甲号。
- 10) この分析表は民間にも流布した。1880 年出版の折田佐吉『草津温泉の古々路恵』は 10 丁の小冊子であるが、同じデータを掲載している。鳥瞰図では、折田佐吉が出版した 1880 年の図に分析表が確認される。
- 11) 「明治 9 年管下布達留」群馬県立文書館・群馬県行政文書 A0181A0M 63 2-1、本県第百弍号。引用文には読点を加えた。
- 12) 「群馬県温冷泉分析表並医治効用調」群馬県立文書館・群馬県行政文書 A0384A0G 2202。
- 13) 内務省衛生局編 (1886) 『日本鉱泉誌』上巻・中巻・下巻、報行社。
- 14) 内務省衛生局編 (1935) 『全国鉱泉調査』、内務省衛生局。
- 15) 前掲 13)、上巻 50 頁。
- 16) ランキングの詳細については、関戸明子 (2007) 『近代ツーリズムと温泉』、ナカニシヤ出版、を参照のこと。
- 17) 内務省東京試験所編 (1915) *The mineral springs of Japan*. 三共株式会社。
- 18) 内務省衛生局編 (1923) 『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』内務省衛生局。
- 19) 前掲 18)、43 頁、119 頁、167 頁。
- 20) 草津温泉の事例に関しては以下を参照されたい。①関戸明子 (2011) 「絵はがきから草津温泉の景観を読む」、えりあぐんま、17、43-56。②関戸明子 (2012) 「鳥瞰図にみる近代—草津温泉を事例として」、歴史地理学、54(1)、39-53。③関戸明子 (2018) 「江戸後期の草津温泉絵図の記載内容に関する考察」、歴史地理学、60(4)、1-19。④関戸明子 (2018) 『草津温泉の社会史』、青弓社。
- 21) 関戸明子 (2020) 「明治期から昭和初期における草津温泉の時間湯」、群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編)、69、55-74。
- 22) 関戸明子 (2020) 「明治期の旅をランニング・スタイルで体験する」、地理、65(8)、51-56。